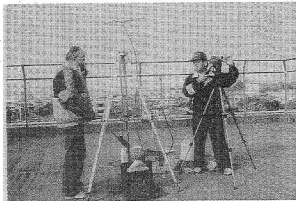


自主防災会が地域防災訓練

アマ無線非常通信協力会 音声・画像を送受信



アマチュア無線非常通信協力会が今泉小屋上に拠点を選び画像を送信

情報伝達の「使命」に備え

一地域防災の日(三日)、富士市内でも二百九十五の自主防災会が午前九時の時報と同時に一斉に訓練に入り、避難、炊き出し、水防、さら一部では救助・救出訓練も行われた。災害時最も重視される情報発・受信の分野でも、富士市アマチュア無線非常通信協力会(高沢慶彦会長)から二十人が出勤し、音声・画像の両面通信訓練をした。この日の動員数は市内全域で約三万四千人に上った。

市立今泉小に無線通信本部を設けたアマ協力会は、地上に音声通信、南校舎屋上に画像通信の拠点を配備。屋上では高沢会長らが市街地周辺の様子小型カメラを通して市役所の災害対策本部に送り続けた。

アマ協会の訓練参加はこれが六回目という。装備は驚くほど軽量で簡単だ。電源は小型バッテリー。小型カメラがとらえた映像は、古いトランスミッター程度の送信機を経て、会員らが手づくりしたオリジナルのアンテナから市役所の対

策本部に送られる。見通しのきく範囲なら、この程度の軽装備で十分、電波は届くが、実験では富士・富士宮両市役所間でも映像送信が可能だったという。アンテナを支える三脚も、測量用のものに少し手を加えただけ。

この日は本部に設定した今泉小の地上組、屋上組のほか、富士川河川敷で行われた陸上自衛隊の渡河訓練の様子を別の会員が静止画像で「災害対策本部」に送ったほか、各地の訓練現場に十数人が散って、無線送信訓練をした。

協力会の会員は、およそ二百人。イザ災害、という場合は、まず各員がそれぞれの居住地と周辺の情報を災対本部に送ることになっている。しかしまだボランティア保険に未加入であるなどから、それ以上の行動については踏み込めない、という。

高沢会長は「一次の総会には、保険加入や、災害時対応などを話し合ってみよう」と言う。

会員のほとんどはサラリーマン。高沢会長自身も市内の機械メーカーで勤めている。協力は、もちろんボランティアだ。午前中、日が差したとはいえ、校舎の屋上はひどく冷える。地域の訓練会場は大勢の人たちが集

まり、炊き出しや水防など大きなアクションが目立ったが、無線通信の現場はひっそりと静かで地味なもの。

だが、アマのボランティアは「混乱状況の中では正確な情報通信が死命を握る」として、屋上の寒さに耐えながら、およそ二時間にわたり画像を解説付きで送る「実況中継」をしていた。